

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大西 慎也

題 目 小学校社会科学習における概念獲得過程の「思考」の評価
－「認知図」による空間的図式の可視化を手立てとして－

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

平成20年版学習指導要領からの改訂にむけた準備が進んでいる。改訂のポイントは、「コンテンツ・ベース」から、「コンピテンシー・ベース」への転換である。それに伴い、21世紀学力などの「資質・能力」の育成が重視されようとしている。育成すべき「資質・能力」の中核となるのが「思考力」である。「思考力」を育成するためには、子どもの「思考」を評価する方略が重要となる。しかし、文部科学省が「評価基準を『何を知っているか』にとどまらず、『何ができるか』へと改善することが必要」と述べているように、その評価方法が明確にはなっていないのが現状である。

本研究では、そのような問題意識をもとに、社会科において獲得する概念の構造を空間軸、時間軸に基づいて明らかにし、その構造に基づいて「思考」を可視化し、評価する方法を開発し、さらに、評価問題を開発することを目的として、研究を進めた。

本論文は、序章及び終章を含めて、八つの章から構成されている。

序章では、現在の教育界における、学力観に関する論議やそこから明らかになった課題から、本研究の目的を明らかにした。さらに、研究の方法として六つの視点を示した。この六つの視点が、今後の章ごとに論じていく内容となっている。

第1章では、わが国の社会科における「思考」の評価の現状を明らかにし、「思考」の評価を行うための知見を得た。分析対象は、「社会科教育学の先行研究」「小学校で最も活用されている評価方法である、業者による評価問題」「国立教育政策研究所による学力調査における評価問題」である。それらの分析から、「思考」過程が評価されておらず、「思考」結果が評価されているため、「思考」が評価できていないことが分かった。そこで、子どもが社会科の授業で獲得している概念の構造を明らかにし、その獲得過程を可視化することにより、「思考」の評価を行うこととした。

第2章では、小学校社会科において獲得している概念の構造と、その獲得の過程を明らかにした。社会科において「思考」結果として獲得しているのが概念である。概念の獲得には、外延の拡大である「概念形成」と内包の精緻化である「概念達成」がある。子どもは、概念

形成と概念達成を繰り返しながら、概念を獲得していることが明らかになった。そして、獲得している概念は、地理的スケールに応じた空間的図式であることを明らかにした。地理的スケールとは、地理的事象が生成する過程を表しており、それにより対象地域を時間軸と比較して、その動態を記述することが可能になる。また、空間的図式としての概念は、地理事象だけでなく、歴史事象においても同様であることを明らかにした。このことにより、小学校社会科において子どもが獲得している概念は、空間的図式であることが明確になり、その構造も明らかとなった。

第3章では、第2章で明らかになった空間的図式を、子どもが表現するために図式化する方法を開発した、これまでの社会科学学習において活用されてきた、概念地図法やウェッビング法の成果と課題を示し、その課題を克服するために「認知図」を開発した。「認知図」は、円形をしており、その階層は知識の構造図に準じている。認知図に直接記述されている内容は、記述的知識や分析的知識である。しかし、それらを組み合わせて説明することで空間的図式としての概念となる。この「認知図」を活用して、新たな社会事象を探究する際に、「認知図」のどの要素を活かして探究しているのか、また複数の「認知図」をどのように組み合わせて探究しているのかを分析することで「思考」を評価することについて論じた。

第4章では「小学校社会科地理学習」、第5章では「小学校社会科歴史学習」について授業を開発し、実践した。これまでの大きな課題であった「思考」の評価を、子どもの概念獲得過程を可視化することにより、可能にした。「認知図」を活用して、新たな社会事象を探究することにより、子どもがそれまでに獲得した概念の何を活用して新たな概念を獲得しているのかを可視化した。また、単元において「認知図」を何度か書かせることにより、概念が成長している様子を見ることも可能になる。

第6章では、評価問題の開発を行った。単元の知識の構造図に基づいた「知識」や「理解」を評価できる問題、さらに情報を得るために重要な「技能」を評価する問題とともに、その単元で学習して獲得した概念を活用して新たな社会事象を探究する「思考」を評価できる問題を開発した。実際に地理学習として開発した「日本の産業」に基づいた評価問題を作成し、実践した。子どもたちの概念獲得過程における「予想・仮説の設定」場面において、何を根拠にしているのかを可視化することにより、「思考」の評価を行うことが可能となった。

終章では、ここまで述べた成果と、次の三つの課題を明らかにした。

- ①誰にでもできる汎用性の高い実践にしていくこと。
- ②評価問題のより一層の精緻化を図ること。
- ③「認知図」と板書やノート記述との関連を示すこと。